

## 新「日本文化」論——序説

### 1 旅行の中から

ある年、投宿したパリのホテルで朝目覚めてテレビをつけると、明らかに日本のアニメとわかる番組が放映されていた。およそ一〇年ほど前のことだ。はっきりした日時も、放映されていた番組も、いまは記憶に定かではない。しかし、それ以前二〇年ほど前に初めてパリを訪れたとき、アニメを見た記憶はない。もっともそのころは、テレビなど備わっていない安宿しか泊まれなかったことも考慮しておかなくてはならないけれども。とにかく、一〇年ほど前のパリ滞在では、日本製のテレビアニメが、一つならず放映されていたことが強く印象に刻みつけられた。

それから数年後、意識的に日本に関するモノ・コトを海外で見つけようとしていた私は、再びパリで日本のアニメ番組に出会うこと

になった。しかもずいぶん数多く。それにこのときはちゃんと記録を残している。

一九九三年三月三〇日「カリメロ」、同三月三一日「カリメロ」「メープルタウン物語」、四月二日「キャプテン翼」、同四月三日「キヤック党忍伝てやんでえ」「ピーターパンの冒険」、同四月四日「リボンの騎士」。

いずれも日本のアニメーション会社が製作し、日本のテレビ局でかつて放映されていたものである。それがフランス語に吹き替えられ、朝の子供番組で頻繁に放映されている。

私はパリに滞在する前にポルトガルのリスボンを訪れていた。そこでもいくつもの日本製アニメ番組を朝のテレビ放映に見ることができた。日本製アニメの放映は、フランスだけではなく、ポルトガルでも、さらにスペインでもイタリアでも行われているのを目にし

白幡洋三郎

た。またその後別の機会に、香港、シンガポール、タイ、ベトナムなど、アジア諸国でも放映されているのをわずかな滞在中にも実見した。実験の範囲ではフランスが最も頻度が高かった。

これを、たんに日本の製品が海外市場に進出している事態とらえるだけでは不十分だろう。日本の子供たちが享受している楽しみを、フランスの子供たちも同様に受け入れていることを意味する。

日本の子供の好みとフランスの子供の好みに一致するところがある。もう少し踏み込んで言うと、日本の子供とフランスの子供は、共有できる文化を持っていることにならないか。そして共有する文化のもとなつていのが日本生まれのアニメである。

アニメは日本の子供に広く受け入れられている生活文化だろう。上に挙げたアニメから一つ例を取ってみよう。「キャプテン翼」は、日本の学校やクラブの制度の中でくりひろげられるサッカーの物語である。そこで、背景・舞台装置に日本独特のものがあらわれる。

日本の少年の心が、友情や悲しみ、憎しみなどを伴ってさまざまに描かれ、努力や根性などの描写が見られる。日本に独特だと思われる精神性もよく出てくる。しかしそんな描写が違和感なくフランスの少年にも受け入れられているとすれば、このアニメは少なくとも少年のなかに共通するなにかをつかんでいることにならないか。少年の心をとらえる普遍的なものが存在するといえないだろうか。従って、それは日本独特のものと単純にとらえることはできない。

しかも日本語がフランス語に置き換えられた上で放映され、違和感なく享受されているならば、このアニメは、通文化的な性格を強くもっているということになる。

どれほど日本のテレビアニメがフランスで放映されているかについては、かつてパリに長期滞在した社会学者桜井哲夫の報告がある。その報告によれば、フランスのテレビ番組にあらわれるアニメの中で、日本製が圧倒的な割合を占めていたという<sup>(1)</sup>。

日本のアニメは各国語に吹き替えられ、世界の子供の共通の楽しみとなつているようだ。戦後日本の子供の世界を思い返してみると、これとよく似た現象はあった。テレビが普及し、多くの子供たちが食い入るようにブラウン管を見つめはじめた頃から、放映される番組のほとんどを、アメリカ製のアニメが占めていた。「ポパイ」「バットマン」「ウッドベッカー」「バックス・バニー」などがそれぞれである。またテレビアニメに先立って、たくさんの子供たちの心を引きつけた劇場用アニメ映画も「白雪姫」「ダンボ」など、アメリカのディズニー社のものが圧倒的だった。当時これらアメリカ製アニメの洪水がどのように受けとめられていたかを考えてみると、それは先進文明、普遍的な娯楽ととらえられていたように思われる。

アメリカ製のアニメは、過去の時代には存在しなかった新しい技術によってつくり出され、新しい媒体を通じて提供される「先進性」を備えていた。さらに日本の子供だけに限らない、どこの国の

子供も享受するもの、しかも子供だけに限らず大人も楽しめる「普遍性」も備えていた。つまりそれは「文明」と受け取られていたに違いない。当時はこれらのアニメが、アメリカ社会の習慣や道徳を反映しているとか、アメリカ独特の美意識や理想の表現であるとは思われていなかったろう。つまりアメリカ「文化」として受け取られてはいなかった、と私は考える。それは普遍性や先進性を備えた「文明」であり、アメリカ固有の「文化」とはまったく考えられていなかった。

ところがいま世界中で放映されている日本製アニメを見る日本人の意識は、日本的なものが世界に受け入れられている事態を「不思議」ととらえる。これは日本人の楽しみであり、つまり日本独特のものだという「文化」のとらえ方にほかならない。

梅棹忠夫氏からうかがった話であるが、ローマでテレビをつけたら日本製アニメ「一休さん」が流れていた。これを見て氏はやはり「不思議」だと思ったという。私も「不思議」と思った。室町時代の禅寺が舞台である、いわば特殊日本の物語がイタリアですんなり理解されるものだろうか。ほんとうに彼らはわかっているのだろうか。どんな受け取り方をしているのだろうか。そんなふうに思ってしまう。この感覚は、やはり日本製のアニメを「文化」の文脈で考えていることを示しているように思う。少なくとも普遍性があり、先進性を備えた「文明」としてはとらえていないだろう。

だが、イタリア人が「一休さん」を日本人ほどには理解できずがなないと断言できるだろうか。カトリックの修行僧や修道院の存在を考えれば、案外すんなりと受け入れられているかもしれない。むしろ日本人より深い理解ができていてもあり得る。われわれが勝手に日本の歴史事情はわかりにくく特殊であると思いきんでいるにすぎないと考えてみる必要があるだろう。

なぜ戦後のアメリカ製アニメは「文明」の感覚で受けとめられ、現在の日本製アニメは「文化」の感覚でとらえられるのか。この問いへの答をさがすなから、文化と文明をどう区別するのかという、長らくそして何度も議論されながらいつまでたってもはっきりしない行き止まりのような難問に、一筋の光を当てることができはしないか。そして日本文化をどうとらえるのか、何をもって日本文化とするのかというこれまた難問に、海外で見られる日本のモノやコト、そしてそれらを外国人がどのように受け入れているかを見ることから少しははっきりした輪郭の見える答を出せないだろうか。

こんな思いから、まず愚直な正攻法に思えるが、従来行われてきた文化と文明の定義を振り返っておきたい。

## 2 文化と文明

文化と文明は近代の日本語の中でつねに厄介な定義上の問題をもちだし続けてきた。英語に置き換えるなら、文明が Civilization で

あり、文化は Culture にあたるとされる。けれどもこれではただ別の言語に言い換えたにすぎず、それまでの区分の困難が解消されるわけでもない。アメリカの文化人類学者クローバーとクラックホーンによる共著『文化——概念と定義の批判的考察』では「culture Ⅱ文化」には一六一の定義があるという。大まかに俯瞰するとやはり文明に対する定義の方が単純で、これに対して文化に関する定義はバラエティーに富んでいるようだ。

文化と文明に関する区別と定義づけに疲れた人たちが、もうなにも考えたくないという感じで「文化・文明」と呼ぶ安易な道もある。けれども「常識的には、何となく、『文化』は精神的で、『文明』は物質的、といった見方が広く通用しているように見える」という上山春平の考えが普通であろう。そしてこうした使い分けが生まれる背景には、一八、一九世紀のヨーロッパ各国が置かれた文化的、政治的、経済的な位置と、各国それぞれの国際的な関係が絡んでいる。現在われわれが何となく感じている「文化」は精神的な領域に属するとの理解は、ドイツ流の文化概念とつながっている。ドイツ語圏における文化の概念は、Kultur という言葉に代表されており、それは学問、芸術などの高度な精神的営みとその活動を通じて生まれるものを意味する。文化のこうした理解は、一八、一九世紀のドイツ語圏における社会状況を反映したものであった。

この時代には哲学ではカントやヘーゲル、文学ではゲーテやシラ

ー、音楽ではモーツアルト、シューベルトやベートーベンが活躍した時代である。学問、芸術など精神的な活動の分野では、ドイツ語圏がヨーロッパの中でも抜きん出ていると認められた時代だった。そこでドイツ語圏では、この抜きん出た分野全体を指す言葉として Kultur Ⅱ文化が用いられたのである。

上山春平の表現を借りてこの事情を説明すると、「イギリス人やフランス人たちが、当時の世界における最高水準を自負する彼らの政治的ならびに経済的な達成をはじめとして、学問や芸術等をもひっくるめて『文明』(civilization, civilisation)とよんだのになんして、ドイツ人は、みずからの誇りとする学問、芸術等の精神的活動とその所産を『文化』(Kultur)とよんで、『文明』と区別したのである」。

戦前戦中に、旧制高校や大学を経験してこのような文化と文明の観念を身につけた日本の知識層は、ドイツ風の考え方を身につけている例が多く、また彼らの言論や著作を通じて世間的な通念もできあがっていた。ところが戦後の日本にこのような観念をゆるがす考え方が入ってきた。おもにアメリカの文化人類学者たちによって形成されてきた、文化を人間集団の生活様式 (way of life) とする考え方である。いわゆる未開社会を調査地としてその成果から導き出された文化概念は、「社会のルールとか信仰などのような、内面的ないし精神的な側面と同時に、衣類や農具などのような、外面的な

いし物質的な側面をも含むものと考えられている」<sup>(5)</sup>のである。

ここには近代の知性が従来思い描いていた未開社会像が、大きくがらがらとくずれたことが反映されている。いわゆる未開社会も「進歩」し、「発展」する。近代が体験したような進歩や発展とは異なるけれども、未開社会は延々と続くかのような停滞を示すのではなく、変化をすることが確認されたことの衝撃がこのような文化概念をつくらせたのである。人間の生活様式全部をひっくり返して文化ととらえるこの考えは、日本の知識社会が抱いていた「文化」と「文明」の概念に混乱を引き起こした。だがその後、この英米流の文化概念は広まり、かなり定着したかに見える。

ちなみに「広辞苑」(第三版)による「文化」の定義を見てみると、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果」となっており、これは英米流の文化人類学の影響を受けたのちの定義であることがうかがわれる。そしてその次に「衣食住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含む。文明とほぼ同義に用いられることが多いが、ドイツでは人間の精神的・肉面的な生活にかかわるものを文化と呼び、文明と区別することがある」と記されている。

このように、戦前の日本の知識社会の雰囲気は、いわば「ドイツでは」というただし書きの形のみ、記録され生き残っているかに見える。けれども観念の上では右のような定義が了解されているか

に見えて、じつは本当のところ、肌身に感じる実際の感覚ではそうではないように私には思える。やはりあらたまって「文化」というときには、高度な精神的な所産に限ると見る感覚は、まだ根強いようなのだ。文化と文明とをまとめて説明する「文明とは機構、装置、組織、システムを指し、文化とはそれを担う人々の価値観を指す」との梅棹忠夫の簡潔な定義がある<sup>(6)</sup>。しかしこれも文化を精神的な領域に限定する点で、従来の文化概念の枠内にあるように思える。

このような状況をふまえて、上山春平は文明を「ある水準以上に発達を遂げた社会における文化」と定義しようとの提案を行った。

この定義は、じつはそのまま受け取って一人歩きさせるのは、著者には迷惑なことだろうと思う。というのは、この定義について、上山は細かな定義をさらに付随させて精密な定義に仕上げる努力を行っているからである。とくに「水準」とはどんな水準を言うのかについて上山は、はっきりさせておかなければならないと記している。しかしこの論考は文化を扱うのであるから、そのあたりの詳細な検討は上山自身の『日本文明史の構想』に譲ることにしたい。

上山説の「文明」には、産業革命や市民革命を経た社会のものという限定がある。それに付随して、ヨーロッパ文明が、文明概念の中心にあるとされている。一方、文化については、おおむね「生活様式」と定義すればよいとの見解が示されている。以上の諸点をさしあたり確認しておけば、現在文明と文化がどのような意味をもた

せられて通用しているかの理解には十分であろう。

### 3 日本文化論の限界

日本文化論は、日本人論と呼ばれる分野とともに生みだされてきた。日本文化論、日本人論が続々と現れたのは敗戦後のことで、桑原武夫、加藤周一、梅棹忠夫、中根千枝らが次々に日本文化の特徴や日本人の特異性についての独自の見解を発表した。<sup>(8)</sup> これらの一つ一つについての論評は、本稿の課題ではない。むしろこれらが日本文化を論じ、日本人を論じている姿勢の中に共通するものは何であるかを指摘することが必要だろう。それは敗戦に打ちひしがれ、自信を喪失していたとされる日本人を鼓舞する意図がいずれにも色濃く現れている点である。

鼓舞する姿勢にも違いがあり、「俳句第二芸術論」として有名になった桑原武夫の「第二芸術」は、西洋の芸術と芸術思想のこころざしの高さと比べ、俳句の芸術上の欠陥を指摘し、そのことよって「鼓舞」を行おうとした。これに対して加藤周一の「日本文化の雑種性」は、異文化を取り入れて混ぜ合わせ、雑種化させるところに日本文化の特徴を見だし、これを肯定したものだ。雑種文化は日本のみならずどの文化にも起こるものであるとして、その意義を認めたものである。桑原は日本文化を否定的に語ることで、加藤は肯定的に語ることでそれぞれ「鼓舞」の役割を果たそうとした

ものだった。

そんな違いがみられるけれども、いずれも海外において、日本商品の市場への進出や日本人の活動が活発にみられた時代ではなかった。現在のようにどこへ行っても「日本」が目につく時代とは異なり、ほとんど見あたらない時代だった。したがって論じられる日本文化は、日本という地域を出ない、日本の範囲を超えない、それゆえに当然、地域に独特の「文化」として論ぜられたのである。

とくに戦後ながらく、海外で出会う「日本」は、日本人自身にとっても普通でない、むしろ特異なもの、「エキゾチック」なものばかりだったといってもいいすぎではない。忍者、禅、生け花、茶道などはその典例であり、いわゆる「フジャマ・ゲイシャ」イメージの日本が、明治・大正にとどまらず、昭和戦後になっても海外に出た日本人を待ち受けている日本「文化」だった。そこで、海外にだけ見聞できる知識人たちこそ逆に、「日本文化」にはエキゾティシズムがついて回っていると思いがちになった。日本文化を何か自国にない奇妙なものだと見なす、つまり普通の外国人が考える日本イメージにこだわることになった。

いま、不可思議で奇妙な日本像が以前に比べればずいぶん減少し、外国人の日本理解もかつてよりはるかに落ち着いたものになりつつあると私は考えている。この事態をもたらしたのは、正しい忍者像や正確な禅の思想が広まったためであるとか、また生け花・茶道な

どの熱心な普及活動によるなどとは考えられない。例を挙げるとすれば電化製品や自動車などの海外進出によって、じっさいの日本人の生活の輪郭が理解されはじめたためというほかない。あるいはそれよりはるかに普及の度合いはおとるだろうが、日本食・日本料理やアニメやマンガなどを通じて、また、東京を代表とする日本の都市の活動や新幹線などの近代装置についての情報が伝えられることによって、日本理解の輪郭ができてきたためだろう。

忍者のように行動し、禅に親しみ、花を生け、茶道をわきまえてゐる日本人が、どれほどいるだろうか、などと考えること自体、すでに噴飯ものである。だが、自動車を持ち、電化製品に囲まれ、アニメやマンガを楽しむ日本人は、間違いなくたくさんいる。日本人がそんな暮らしをしている、と外国人が想像することこそ、良かれ悪しかれ等身大の日本人（の生活）が理解されることにつながっているのは確かなことである。

にもかかわらず、日本の「知識人」のなかに、逆に日本が海外でどのように理解されているかについて、むしろ奇妙な「理解」を示す人がいる。よく、アメリカの日本たたきというが、実際はほんのちよつとした日本批判や、一部の反日ふうの行動が針小棒大に伝えられていることが多いのではないか。

どの国にも、他国・異文化批判を口にするものがあるのは当たり前だが、些細な発言やわずかな勢力の行動を、大きな潮流として事

大主義的に扱う日本の知識人こそアメリカ人以上に、いやアメリカ人もやっていないような日本たたきを演出し、じつは結果的にアメリカ人に責任転嫁をしている面すら感じられる。

さらに、一見日本文化を相対化して公平に評価しているかに見える論考も、先の表現でいえばきわめて「知識人」的であり、先入観（時には偏見と言つていいようなもの）によってつくりあげられていることもある。<sup>(9)</sup> その典型的な一例が、青木保の『日本文化論』の変容である。この著作は、戦後の主要な日本文化論を時代区分して歴史的に位置づけ、その時代ごとの役割を冷静に説いたと見なされたようだ。だが、青木保の基本的な姿勢は、文化相対主義を尊重しているかのごとく自ら述べるのに反して、強い思いこみにしばられている。たとえば、青木は次のように述べている。

「……毎度海外へ行く度に否応なく感じさせられることは、日本製品が氾濫し、日本の「進出」がここかしこにおよんでいる明らかな兆候をいやというほど見ながらも、実際には日本と日本人の「孤立」が際だつことである」（同書、一四ページ）

日本人の「孤立」が際だつ、と書いているが、いったいどの地域で、どれほど際だっているのか一向に具体的でなく、まったく明らかにされていないので、これは「私はそう思う」と述べているのだろう。この文章の一つ前の段落で、「ロックフェラーセンターや近代名画の買収行為」にふれており、また同じ段落の少し前の文章に

「アメリカの不動産や映画会社の買収」を挙げている。どうやらこれらが、「ここかしこにおよんでいる」という日本「進出」の例であるらしい。だが私からいわせれば、たったそれだけか、としか言いようがない。

そこで、「日本製品が氾濫し」と書かれても、どんな実例があるのだろうか、氏の感受性が強いだけで、大して氾濫していないのではないか、と揚げ足を取りたくなるのも当然だろう。本当ですか。

本当にあなたは日本製品の氾濫を見たのですか、と思ってしまう（日本製品の「進出」なるものの実体については、拙著『カラオケ・アニメが世界をめぐる』を参照していただきたい<sup>10</sup>）。

青木の記述が、研究方法の一つとしてフィールド調査をやったことのある、文化人類学者を名乗る人によって書かれたものだと信じがたい。なぜなら、新聞記事をはじめとするマスコミ報道以上の詳しい情報はまったく盛り込まれていないからである。むしろマスコミよりも印象中心で、情報量は乏しい。

私は、この著書を、いわゆる日本人論、日本文化論の戦後史のトレース作業の一つと見ることに抵抗はないが、印象と胸の思いをつづったエッセーと受け取っている。包括的に日本文化論を取り上げたこの著作に、従来の日本文化論の限界が、それこそ包括的に現れている。

青木は、『菊と刀』を著したルース・ベネディクトの姿勢の問題

点にもふれながら、「だが、その『複眼的』なアプローチと、『文化相対主義』的態度とは、実のところ『日本文化論』に多大な示唆を与えるべきものであったし、これからも与えるものと評価できる」（同書、一五四ページ）と記している。そして、文化相対主義の姿勢に期待しつつ、「それ（何々人は）」という言い方——筆者）はまたあくまでも『イデオロギー』であり（ルース・ベネディクトのいう

——筆者）『仮定』であることを忘れてはなるまい。『仮定』であるがゆえにそれだけ論じ易く、結果として多く論じられる傾向にあるが、『仮定』がいつの間にか状況によっては『前提』となったり、『事実』にすり替わったりすることに対しては、よほど注意深くあらねばならない」（同書、四五ページ）とも述べている。その通りと思うが、まさにその注意をみずから忘れ、残念なことに従来の日本文化論と同じ欠陥を繰り返してしまっている。

「日本と日本人の『孤立』が際だつ」などの不用意な表現はその典型である。また、「年々海外で生活経験をするのが『豊かな』日本人であることと相反して、心理的に困難になって行く傾向があるのを感じざるを得ない」（同書、一二ページ）といった、文化論にとっては重大な発言が、何がもとで、どのように「心理的に困難」になるのかの具体的な事例は示されないままつづられる。

このような記述に接していると、ハルミ・ベフが、日本文化論の特徴を「大衆消費財」的な「イデオロギー性」に求められたことが、



私の頭に浮かんでくる（増補・イデオロギーとしての日本文化論<sup>(1)</sup>）。従来の日本文化論には、あらかじめ論ずる目的が定められている、とのベフの指摘が、同じく感じられるからだ。青木保の『日本文化論の変容』は、日本文化論と見なされるものを論じた「論の論」すなわち「メタ文化論」であり、「あくまでも『日本文化』を論じる『言説』のレベルに限って検討する」と記されている。

したがって、「日本文化論」の著作例を挙げることは必要であつても、対象となる「日本文化」なるものの具体例を挙げることは必ずしも要求されないのは当然である。だが、「日本文化論」の個々の著作例を分析する叙述に先立って、著者の基本的な姿勢を述べた「はじめに」で、日本「進出」の具体例をほとんど挙げることなく、印象に依拠して、重大な結論を吐露してしまっている。いわく「日本と日本人の『孤立』が際だつ」、いわく「大学から企業や家族関係まで『国際化』に欠ける国家」。

みずからの自重の言葉に反し、相対化を忘れた、イデオロギーをもつ従来と同様の「日本文化論」の問題点を抱え込んでしまっているのである。

ハルミ・ベフは、青木保と異なる視点から、日本文化論とされるものを対象とした「メタ文化論」すなわちベフ自身の言葉を借りれば、「日本文化論の人類学」をやりたいと述べ、実際それを進めている。その成果に期待したいが、希望をいえば、ただ「日本文化

論」のみではなく、それらを相対化したとされる「論の論」（青木保の『日本文化論』の変容）のような著作）をも対象に含めた人類学が必要だと思う。

こうした「文化論の人類学」「メタ文化論」が、日本文化研究を進めて行くのに必要だと思ふ。その一方で、私はおおよそ「生活様式」と考えた場合の日本文化が、具体的にどれほど海外に「進出」しているのかをはっきりさせる「フィールド調査」がぜひ必要だと考える。調査にもとづく具体的データ抜きでは、日本文化論は従来の文化論と同じイデオロギー性をもつ大衆消費財だけに終わってしまうと考える。日本文化の海外「フィールド調査」とは、日本文化がどのように「受容」され、どのように「反発」あるいは「無視」されているのかの、印象ではない実例を集め、具体的な姿をさぐる作業である。

#### 4 日本「生活文化」の海外進出——食を例に

かつて外国人のあいだで話題にのぼる日本食といえは、ヤキトリ・テン普拉・スシが御三家といったところだった。これに加え、調味料としてショウウをベースとするテリヤキやサシミもやはり日本食のイメージをつくりあげていた。もちろんいまも、これらは海外日本食レストランの大事なメニューではある。しかしこれまでは、庶民の手が届きにくい高級レストランのメニューでしかなかったこ

これらの日本食に加えて、最近ではカツ丼・天丼あるいは焼き魚定食・コロッケ定食などという、サラリーマンや学生が食べるようなランチメニューも、これらを主体にした日本食レストラン（日本食堂といった方がしっくりくるようだが）で提供されることが増えている。いまやニューヨークでもロンドンでもマドリッドでも、サンマに大根おろし、それに味噌汁をつけて昼の定食として食べる、といったようなことができるようになってきた。

食の世界は、日本食の分野に限ってみても、確実に国境を越える「ボーダーレス」の時代になってきている。ただしこのボーダーレスの背景には、かつてのような色濃い国籍がないのが特徴ではないか。日本食といっても、もともとの性格が「日本」のみで成り立っているのではない点にも注意すべきだろう。ふつう日本人が食すテンプラ、コロッケ、カレーやカツ丼などがどのようにして誕生してきたかを、少し考えてみるだけで、日本の伝統食だとみなすことができないと同時に、日本食でないと言いきるわけにも行かない。洋食と名づけられた和食、あるいは和風の洋食というほかないだろう。これを広い意味での「日本食」とみなせば、それらがいまや世界各地に出回っている。

とりわけ簡便な大衆食としては、即席めんの世界普及は特筆すべきだろう。即席めんは海外との接点を見出そうとする努力の中から、容器や食器にも大きな工夫を加えてきた。味やめんの細さ長さのほ

かに、食べ方の違い（食べ方の文化的差異）を乗り越える工夫がどうしてもいる。カップめんの誕生は、文化の差異を乗り越える技術的な努力の産物であろう。「ハシではなく、フォークで」。これは小さなアイデアだが、じつは馬鹿にできない大きな配慮である。そこに見られるのは、生まれた国の「文化」をかたくに保持し、あるいは押しつけるのではなく、むしろ無国籍者となり、現地に適應するかたちで入り込もうとする姿勢である。このようなボーダーレス化、無国籍化は、別の表現でいえば、柔軟な文化の持つ姿勢と言えるだろう。生活に直接つながる日本の「生活文化」が広く海外に受け入れられている理由の一つに、「柔軟性」が挙げられる。

すでに有名になったトーフアイスクリームは、ふつうにアイスクリームとして受け入れられている。日本人なら思いつかなかったような豆腐の食品利用を西洋人が開発し、独自の食べ物に仕立て上げてゆく。われわれの観念だけでは測れない尺度（＝食文化）が、各地に存在する。そんな多様な食文化を背景にもつ、多様な味覚によって各地の食は相互に「吟味」されてゆく。各地の文化が相互に吟味しあい、影響を与え合う。

その結果の一つとして、たとえば日本の食べ物に対する西洋人の解釈が、われわれからはたとえ「誤解」であろうとも、日本食の普及につながっている。じつはトーフアイスクリームは広島島の業者が開発したという説があるが、受け入れ広めたのはやはりアメリカ人

を筆頭とする西洋の人たちである。食文化の伝統を「革新」するのは、その食の本国の人たちだけではない。

現在、食文化の視点から見ると、日本食はかつてとは違うボーダーレスを経験していると考えてよい。たとえばショウウユをつくっているメーカーは、イギリスにもアメリカにもブラジルにもある。また新しいところではカニ風味カマボコが世界に受け入れられている。アメリカで本物のカニよりヘルシーだと受け入れたのが、今ではヨーロッパ各国、アジア諸国にも進出している。ショウウユもカニカマボコも人気のひとつはヘルシー感覚にある。やはり低脂肪というヘルシー感覚が効いているようだ。日本人が思いつかなかったような文脈で、日本食は理解され消費されている。じつに食の世界はボーダーレス化が進んでいるというほかない。これは日本固有の食「文化」が、普遍性をもつ「文明」に変身したことを意味するだろうか。

日本では、チョコレートソースをかけたスパゲティを出す店があるという。異様な感じを受けるが、ちょっと考えれば、「豆腐をアイスクリームにして食べる志向と変わらない。イタリア人の中には、たらこスパゲティや高菜など漬け物いりスパゲティ、山菜スパゲティに出くわしたら、スパゲティを逸脱していると異様に思う人がいることは十分に考えられる。しかしわれわれの味覚には、必ずしもトマトソース味やバジリコ味に劣るスパゲティには思えない。その延長上にチョコレートスパゲティが生まれても不思議

ではないだろう。そしてもしそれが広く受け入れられるようになれば、甘い味の、デザートのようなスパゲティの観念も定着するようになるのではないか。

振り返って日本のことを考えれば、たとえばトコロテンは、平安時代からあらわれるが、江戸時代にいたるまで酢とショウウユで食べるのが主流だった。それが、砂糖が回るようになって、甘い蜜をかけてトコロテンを食べる習慣が生まれた。このことを考えれば、食にまつわる観念は、時代によってかわり、当初驚くような味覚が出現しても、頭で処理されるのではなく、舌で吟味されてゆくことになるのが趨勢であろう。

日本人が食す豆腐料理以外を認めず、イタリア人が食すスパゲティ料理以外を認めないのは、食文化における閉鎖的な姿勢といえよう。

個々の文化項目だけでなく、文化論の多くも、このような姿勢をもとに生み出されてきた。すなわち文化に関するこれまでの理論は、このような閉鎖的な思考の範囲で理解されるものを「文化」と呼ぶことで成り立ってきた。文化の側には閉鎖系の価値観があったといえるだろう。しかし「洋食」を含む「日本食」を受け入れている食の世界の現状を見れば、文化を「開放系」で見なければつかめない事態が起こっているように思われる。

## 5 日本文化論の可能性——文化の文明論へ

日本イメージでスタートした日本生まれの商品や日本の生活文化のあるものは、もはや日本を感じさせることなく、世界各地で普通の生活に取り入れられている。しかし一方ではこれから世界に進出しようとして、日本イメージで売り出し中のものもある。日本の商品、広くいえば日本の現在のくらしを体现している「日本文化」がさまざまな形で世界にちらばっている。

日本を意識させられるのは、国外に出たときの方が多い。日本にいても、海外の報道に現れる日本のニュースを聞いて日本を意識させられるように、自国、自分の位置を強く考えさせられるのは外国の存在が大きい。「日本文化」という表現が頭に浮かぶのも、外国にいるとき起きることが多い。それはなぜか。

おそらく圧倒的な異文化に取り囲まれた自分という存在にどこか危うさを覚え、自分を確かめ、ときには奮い立たせるために、支えになるものを求めるからではないか。「危機」にさらされた自分の回復のために「日本人」を意識し「日本文化」を思い出すのではないだろうか。「自文化」は異文化の中で、よりはっきり輪郭が見えてくる。そう言って言い過ぎではないと思う。

現在海外で頻繁に出くわす日本のものを、私は日本の生活文化と呼ぼうというわけだが、これを「文化」と呼ぶのは許されるだろう

か。

子どもの時から十分に訓練されてようやく到達できるような境地はあるだろう。そんな境地に至って初めて心地よく受け入れることができるもののみが「文化」だという考えに立てば、いま海外に受け入れられている「日本文化」の多くは「文化」ではない。なんの下準備も、何の基礎教養も必要とせず、いきなり使え、楽しめるものが受け入れられている。これを文化と呼ぶことに、たとえ生活文化といいかえたとところで反発する人がいることは容易に想像できる。しかし、どうやら「文化」なるものが形成されてゆく現場は、このような混沌とした情景をもつようだ。

現在世界に流通しているものを「日本の生活文化」と規定して、これらが海外に受容される様相を分析することは、従来の日本文化論の欠を補うことにつながると考える。

これまでの日本文化論が扱ってきたものは、変容しないものだけだった。つまり他の文化圏では容易に受け入れがたいもの、普及しにくいもののみを視野に取め、それを「日本文化」と名付けてきた。その多くはほとんど「高級文化」だけであり、受容の仕方、つまり文脈まで拘束し指示するものだった。楽しみ方、使い方まで指示し強制する固い殻をもった「文化」だったと思われる。そこで歌舞伎、能、狂言、茶道、華道など、古態を残し、伝統の形式を守っていると考えられる分野のみ、日本文化とされてきた。じっさいは、これ

らも長い間にずいぶん加工され、変容しているにもかかわらず。

日本文化を研究する姿勢には、文化そのものを対象として、その形成の経緯や独特の性格、その後の変容の歴史などを、日本という地域内部でのみとらえる仕方があるだろう。この研究の姿勢を名付けるとすれば「文化論」の姿勢である。一方、日本文化といわれるものの特徴、独特の性格を研究するにしても、文化そのものよりは、それがどのように受容されるかに焦点を当てて特徴を浮き彫りにしようとする方法がある。日本以外の地域へどのように広まり、どのように受容されるか、別の文化圏でどのように受けとられ、どのような変形が加えられるかに注目するのはこの方法である。こちらの方の研究姿勢を名付けるとすれば、「文明論」の姿勢といつてよいだろう。そして、このような方法によるならば、ひとり日本文化のみならず、他の文化についても異文化圏での受容、反発、拒絶の様相をとらえることによって、それぞれの特徴を浮き彫りにすることができよう。日本文化はその中の一つとして把握しうる。

海外で目につく「日本」は、家電製品や食品、ゲームやおもちゃなどの娯楽、俳句や盆栽などの趣味、文学・芸術からお稽古事といった教養まで、じつに多岐にわたる。なぜこんなものが海外にまで出てきているのか、どうして外国人はこんな日本を受容しているのかと思うことがじつに多い。このようなかつてない海外進出の事態を迎えている日本文化を、日本の範囲内でのみとらえることではも

う済まない。つまり「文化論」の姿勢で扱うことはもうできないのではないか。日本文化を海外での受容の諸相からみることでその特徴が浮き彫りにされる、「文明論」の姿勢が必要だろう。

注

- (1) 桜井哲夫『サン・イブ街からの眺め——フランス社会ウォッチング』岩波書店 一九八九
- フランス・テレビの1チャンネルで放映された日本製アニメのタイトル(原作者「日本名」)
- 『ラム』(高橋留美子『うる星やつら』)
- 『愛しているよ、ジュリエット』(高橋留美子『めぞん一刻』)
- 『ゴールドラック』(永井豪『グレンダイザー』)
- 『黄道12宮の騎士たち』(車田正美『聖闘士聖矢』)
- 『ドクトゥールスランプ』(鳥山明『ドクタースランプ』)
- 『ドラゴンボール』(鳥山明)
- 『カンディキャンディ』(いがらしゆみこ『キャンディキャンディ』)
- 『銀河特急999』(松本零士『銀河鉄道999』)
- 『生き残る者ケン』(原哲夫『北斗の拳』)
- 別のチャンネルから放映されたもの
- 『オリブとトム、サッカー選手権』(高橋陽一『キャプテン翼』)
- 『クレールとティプヌの冒険』(たかなししずえ『おはようスパーク』)
- 『レディ・オスカル』(池田理代子『ベルサイユのバラ』)

- 『キャッツアイのサイン』（北条司『キャッツアイ』）  
『アタックNo.1』（浦野千賀子 一九六九〜七二）  
『エースをねらえ』（山本鈴美香 一九七三〜七四）  
（桜井哲夫『サン・イブ街からの眺め』、および『アニメメディア』  
九三年一月号「テレビアニメ31年史」より作成）
- (2) 梅棹忠夫編『地球を舞台に ボードレス時代を読む』日本放送  
協会 一九九四
- (3) 上山春平『日本文明史の構想』角川書店 一九九〇
- (4) 同前
- (5) 同前
- (6) 梅棹忠夫編『文明学の構築のために』中央公論社 一九八一
- (7) 上山春平 前掲書
- (8) 桑原武夫『現代日本文化の反省』白晝書院 一九四七  
桑原武夫『第二芸術』『世界』一九四七  
加藤周一『日本文化の雑種性』『思想』一九五五  
梅棹忠夫『文明の生態史観』『中央公論』一九五七  
中根千枝『日本の社会構造の発見』『中央公論』一九六四  
中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社 一九六七
- (9) 青木保『日本文化論』の変容——戦後日本の文化とアイデン  
ティティ——』中央公論社 一九九〇
- (10) 白幡洋三郎『カラオケ・アニメが世界をめぐる——「日本文  
化」が生む新しい生活』PHP研究所 一九九六
- (11) ハルミ・ベフ『増補・イデオロギーとしての日本文化論』思想  
の科学社 一九九〇